

注に対する補遺

本書中に不適切な文献使用の用例が見られたため、補遺を設けて、参照した文献資料に関する事情説明と欠けていた引用注を補足させていただくこととした。

「ロシア作家の創作の源泉としてのオプチナ文献をめぐって」という本書の副題が示すように、本書の骨格をなすオプチナ修道院の長老（聖人）と作家、思想家たちとの関わりを示す原資料の多くは、オプチナ修道院が独自に保管している「修道院人物往来記録」と、知識人と長老との交流の記録を核とする所謂「オプチナ文献」に由来するものである。その中にはソヴィエト時代にレーニン図書館に所蔵されていた古文書（コピー）を中心に、口述記録から、オプチナ史編纂のために修道士や研究者たちが収集した歴史的事実の数々、オプチナ修道院がすでに出版もしくは再版した書物のほか、最近になってこのテーマについて発表された研究の原稿なども含まれていた。筆者が使用した文献の中で、後に出版を確認できたものに関しては、可能な限り論文や書物入手し、そこから引用するよう努めたが、原版からの引用箇所をそれら出版物と照合し、頁などの書誌情報を追記していなかったものが一定数あることが判明した。

そこで以下に、注に対する補遺という形ではあるが、公刊された資料に関しては、可能な限り出典と凡その該当頁を付記するよう努めた。本書はもとより、作家や思想家の人生におけるオプチナとの関わりについての事実関係を裏

付ける原資料を集約し、彼らと修道院、さらには長老との相関図、および両者の影響関係から生じた「復活と変容のドラマ」を描き出すことを目指したものであるが、筆者の杜撰な資料管理が原因で、資料の紹介や引用の仕方に空白部分が生じたことに關しては、この場を借りてお詫び申し上げたい。

三八五頁の注2に対する補注Ⅰ

Воропаев В. А. Н. В. Горюх. Жизнь и творчество. Ч. 1-2. М., 1999 が出版された後、内容的にかなりの情報を加筆し、変更を施した Николай Горюх. Опыт духовной биографии. М., 2008 が新たに出版された。さうには Оптина Пустынь. と題する章が設けられており、作家のオブチナ訪問の真の理由が作者によって深く考察されている。「オブチナ文獻」には、一九九〇年代よりヴォロパーエフ氏の研究が数多く集められていたが、同氏はゴーゴリと正教会の関係をアルヒーフにもとづいて明らかにした最初の研究として広く知られている。本書第三章の「ゴーゴリの祈りと修道生活への憧れ——オブチナ修道院との関係」(三四九〜三七四頁)の基幹的情報は当初一九九九年版に依拠していたが、二〇〇八年版が出たことで、一部新版に差し替えた。とりわけ、オブチナ訪問の経緯とその効能についての伝記的事実は後者から断続的に使用した (C. 140-160)。

四七六頁の注1に対する補注Ⅱ

レオンチェフの人生と思想の相互関連性を開示した А. Коноплинцев. Жизнь К. Н. Леонтьева, в связи с развитием его мироощущения. М., 1991 [Репринт изд. 1911 г.] の信憑性の高さは、これも「オブチナ文獻」に入れられていたことから伺える。同書においては、スラヴ民族に接木されたビザンツの修道制がレオンチェフを必然的にロシア、そしてオブチナへと向かわせたことが論理的に跡づけられている。とりわけ、「ニコラ・ウグレシヤ修道院、精神の葛藤と動揺、文字とその他の失敗、クリメント神父」から、『東方、ロシア、スラヴ主義』、重病、レオンチェフの個性、『内的な剪髪』、『オブチナへの移住、様々な思いと「隠遁者の覚書」、秘密裏の剪髪、死』にいたる各章 (C. 93-140) の記述は、いずれも、レオンチェフの思想家から修道士への靈的変容に関する多くの証言とともに、六章の六、七における彼の思想の変遷の基幹部分を支える事実として断続的に使用させていただいた (本書四四六

（四七五頁）。

六八四頁の注30に対する補注III

ここで触れられているゲンナージイ（ペロボーロフ）神父が編集し、かつ公刊した同資料（Священник Геннадий (Белоногов) Оптиные предания о Достоевском. В кн. Достоевский. Материалы и исследования. 14. СПб., 1997）は、オブチナ修道院の書庫に所蔵されているオブチナ訪問者に関する資料のうち、ドストエフスキーに関係するものの主要部分を成している（ソヴィエト時代にはロシア国立図書館に保管されていた）。そこにはドストエフスキーがオブチナ修道院に巡礼の旅に出かけたことに関する修道院の記録が集められ、項目別に記述されている（С. 301-310）。これらの資料の原著者の大半は不明であるが、作家の手紙や、妻アンナの日記と書簡、彼女が余白に書き付けたコメント以外のもは、同修道院が主導して同時代の修道士や訪問者たちの証言から構成されており、修道院のこの作家に関する評価の根拠となっていると考えられる。本書で記載したドストエフスキーのオブチナ訪問に関わる諸事実に関しては（本書五九七〜六一四頁）、概ね同資料をもとに再構成したものである。

六八八頁の注103に対する補注IV

Н.Ф. Буланова. И свет во тьме светит... СПб., 2012. における所説は、オブチナ文献に含まれ、本書でも参照したレフ・カヴェーリンの Историческое Описание Козельской Введенской Оптиной Пустыни. М.: Оптиная пустынь. [Перинт изд. 1847 г.] と Жизнеописание оптинского старца иеромонаха Леонтия (в схиме Льва). Оптиная пустынь. 1991. [Перинт изд. 1876 г.] に描かれた修道生活の誘惑の実態にもとづいて、信仰生活に占める修行の方法と意義に光を当てようとした正教的判断としても至当のものである。二十世紀に入っても、セルゲイ・フーデリがその先行研究である Население Достоевского. М., 1998 において正教会の聖人の正統的立場をフェラポントに見られる狂信的空想から引き離そうと試みるが、著者ブダノフはそれらを総括するものとして、オブチナにかつて実在した異端的分離派の観点を再び引き合いに出しながら、カラマゾフの創造に見られる正教理解の深さを独自の視点から発展させたものである。七（六三二〜六四六頁）においては、主としてこの二冊（カヴェーリンとブダノフ）の論旨に沿って、その議論を紹介した。Л. Каверин. С. 110-119; Н.Ф. Буланова. С. 107-122.

六九二頁の注150に対する補注V

八のスタヴローギン論において（六四六～六六六頁）、その人物像が『白痴』以来、創造的主題として掲げてきた「肯定的人間」の枠組みから外れ、正教的ではなく、技巧的、魔術的な苦行を求めたこと、それはシャートフから頬打ちを受けながら決闘を申し込まず、偽りの重荷を求めて苦行に出ようとしたことに表れていた。その動機でもあった霊の浄化の願いが傲慢さに由来するものと断じたキリーロフの言葉が、自分の器を超えた苦行を求めることを禁じたザドンスクのチーホン主教の著作に発想の淵源を指摘したブダノワとブレトニョフの所説にもとづくものである。H.Ф. Буханова, Указ. соч. С. 98-103; P.B. Плишев, «Скупием мырпие» (О «стапиак» у Достоевского.) В кн.: О Достоевском. II. Ппрат. 1933. С. 252-256.